

日本小説大系

29

新理

日本近代文學研究會編集

現代日本小說大系

第二十九卷

河出書房版

現代理日本小說大系 第二十九卷

昭和二十六年一月十日 初版印刷
昭和二十六年一月十五日 初版發行

定價 百八拾圓
地方賣價 百九拾圓

代著 表者

野上彌生子

發行者

河出孝雄

東京都千代田區神田小川町三丁目八番地
日定近代文學研究會

編集者

荒正人

東京都品川區大井寺下町一四三〇番地
印刷 山口新吉

發行所

東京都千代田區
神田小川町三ノ八 株式會社

河出書房

會員番號 A一一一〇一四番
電話神田(25) 三二七四番

東京日本印刷株式會社印刷

目次

野上彌生子

眞知子

三

宮本百合子

伸子

一九三

解説（荒正人）

四二

野上彌生子

眞知子

結婚問題について、母がこのごろ急にあせり出したのを、眞知子は見遁さなかつた。

父の死後、殊にふたりの姉たちが片づいてからは、未亡人らしく小石川の古い家に引つ込んでゐた母が、口實をつくつては彼女をひとなかへ連れ出さうとしたり、自分でも氣輕く付きあひ先を訪ねたりするのは、そのためであつた。専門學校を出て、なほ大學の講義まで聴いてゐる、才能のある、獨立の考を持つた、美しい娘に取つては、忍ぶことの出来ないそれは屈辱であつた。

或る日。

『ねえ、お母様。』

外出の支度をしてゐる母に對し、眞知子はわざと隠さない不機嫌でぶつつかつた。

『よそで、私の話なんかあんまりしないで頂戴ね。』

母は羽織の紐を結んでゐた手をとめ、眼の隅で娘をふり返つた。

『何んだつて、そんなこと云ふんです。』

『自分のことひとりの家で問題にされるのは、誰だつて厭でせう。』

『結構ぢやないか、問題にならないやうな娘なら、いくら頼んだつて問題にしてくれやしないんだから。』

『頼むなんて。——ぢや、なにを頼むの。厭なことだわ。誰がそんな。——見つともないからよして頂戴。恥ぢやありませんか。』

せんか。』

わな／＼する怒りで、眞知子は納戸の板戸をうしろに、突つ立つたまゝ、母を睨んだ。娘のこの興奮は、未亡人が一度は眞面目に話し合はなければならぬと考へてゐたことに、丁度機會を與へた。

『ちよつとお坐りなさい。』

この言葉で、そこだけ板敷になつて、薄べりの敷かれた、硬い床に、未亡人は自分で先にびつたり坐つた。

『母さんが斯うして氣をもんでるのを、何か餘計なおせつかいでもしてるやうにあんたは思つてゐるんですか。考へて御覽。あと二月たてば幾つになるのだから。』

併し七十日足らずの後に二十四になることが、母を脅やかしてゐるほど娘を脅やかしてはゐなかつた。

『年のことなんかよくつてよ、幾つだつて、そんなものに運命を支配されちやたまらないわ。』

『たまらないつて、年は立派にその力を持つてゐるのですからね。もしあんたがひとりて暮らすのでなかつたら。——それとも一生結婚しないつもりかい。』

眞知子は返事しなかつた。自分から餘計なことを云ひ出したのを後悔してゐた。母に限らず、誰とも斯んなことを、斯んな事務的な態度で話すことは我慢ならなかつた。で、ふだんから、細心な警戒と出來得るだけの冷淡で遁げ廻つてゐた話題であつた。それだけ未亡人は捕へた機會を放さなかつた。

『眞逆あんただつて、そんな無鐵砲なことを考へてはゐない

だらうから、もうそろ／＼分別をつけて呉れなけりや。——
 そりや當節のことだから學問もよござんすよ。出来ることを
 しとく分に損はないともつて、私はそんなことであんたに反
 對したことは一つだつてない。でも、北海道の娘さんたちや
 親類の人たちにして見れば、あんたがいままで結婚しない
 のは、私が甘やかして、好き自由な眞似をさしておからだ
 としきや考へないんですからね。』

未亡人は外出着の袂から新しいハンケチを出し、鼻をか
 んだ。

北海道の大學で生物學を教へてゐる曾根家の當主は、未亡
 人とは義理ある間柄であつた。父は可なり高い地位の官吏で
 あつたが、金を残さなかつたので、未亡人と眞知子はやつと昔
 の家に住んでゐると云ふだけの生活しか出来なかつた。講座
 料を入れても三百圓の収入しかない北海道の方だつて、樂で
 はない筈であつた。この不足は、内科の著名な博士で大きな
 病院を持つてゐる妻の父から容易に補充された。同時に、ど
 んな關係の間でも威力を失はない金銭の價值は、此處でもそ
 れ自身の發揮すべきものを發揮した。彼等は、夫であり妻で
 あると共に、債權者であり債務者であつた。でなくも溫順
 で、寡慾で、悪く云へば朴念仁で、人間の社會よりは、顯微
 鏡の下の世界により多くの興味を持つてゐる夫を操縦するこ
 とは、妻に取つては何でもなかつた。

この勢力のある、可なり美しい、年から云つても眞知子と
 七つしか違はない娘は、その若さと美しさを北海道で消耗さ
 せる氣は決してなかつた。適當な場合に、實家の父の手を利

用すれば、東京の大學か、それに劣らぬ地位を夫のために見
 つけるのはむづかしくはないと考へてゐた。またそれには現
 在の古ぼけた陰氣な邸宅を、もつと快適な當世風の樣式に改
 築しなければならなかつた。實際あんな時代後れの不便な家
 で、東京の空を描いてる彼女の楽しい夢を實現させること
 は、思ひもよらなかつた。にも拘らず、まだその儘で手をつ
 けないでゐるのは、轉任が確定しないためばかりではなかつ
 た。その理由を誰よりもよく知つてると信じてゐるのは未亡
 人であつた。

『馬鹿々々しい。』自然の發展から、話がそこまで及んだ時、
 眞知子は寧ろをかしがつて云つた。『お嬢さんに氣に入つた
 家を建てさせるために、急いで結婚しなけりやならないなん
 て、そんな滑稽な話つてあるか知ら。建てたけりや、私なん
 かに關係なく、いつだつて建ててよ。』

『さうは行きません。あんたや母さんのために建てる家ぢや
 なし、餘計なものがあるうちに無駄なことをするものか。』
 『さう云ふ風に取るのは、お母様のひがみぢやない。』

『そんな考をしてをるから、あんたは母さんに同情かないの
 です。——お父さまはあれだけ確かりした氣性だけに、なか
 なか抜ひ悪いところのあつた人だつたし、亡くなれば亡くな
 つたで、今日まで一日だつて母さんには苦勞の絶えた日はあ
 りやしない。それなのに、あんたつて人は、ひとの氣も知ら
 ないで——』

『そんな話を聞かされると、私なほと結婚しようなんて思は
 なくつてよ。お母様だつて、私を無理にどこかへやつて、同

じやうな苦しみをさせたくはない筈でせう。』

『それは別問題ですよ。母さんが苦勞したつて、あんたまで結婚して仕合せになれないつて法はないんだから。それどころぢやない。今までにだつてあんたがその氣なら、どんな幸福な結婚でも出來たのぢやありませんか。』

『もう澤山よ、お母様。』

この遮りを、眞知子は同時に立ち上り、さつさと部屋を出て行くことでやつと有効にした。

幸福な結婚と云ふものが、母の云ふやうにさう容易に誰にでも手に入るものだと彼女は彼女には信じられなかつた。反對に、春燕の飛ぶのを見て急いでネルを着はじめるやうな、また十二時の時計に促されて、胃の腑が空かなくても空いても晝の食卓に坐らされるやうな、謂はば慣例に過ぎない一つの儀式を境界として、突然特定した或る存在が自分の存在に結びつき、話すことも、笑ふことも、考へることも、食べることも、眠ることも、一人の相手を意識することなしには許されないと云ふ奇妙な生活の中で、眞の幸福や、自然な暢びやかな樂しさがあり得ようとは思はれなかつた。眞知子には、結婚する婦人たちは皆んな怖るべき冒険者に見えたと共に、自分が結婚に對して斯んな考へ方しか持たないのは、まだ誰をも愛したことがないからだ、と云ふことも知つてゐた。と云つて、誰を愛すればよいのであらう。眞知子は決してそんな人には出逢はなかつた。彼女が今日まで結婚しないで來たのは、明かにそれが理由の一つではあつたが、そのために神經質になるほど愚かではなかつたし、知識に對する欲望も十分

彼女を落ち着かした。今日のやうな話の後でさへ、眞知子はふだんと變らない平靜さで、學校に行き、歸るとノートの整理をしたり、參考書を讀んだり、演習の下調べをしたりし、夕方からは一人の女中に手傳つて、大騒ぎして晩の料理を拵へたりすることが出來た。それをまた何の屈託もなくお腹いっぱい食へることも。

しかし、食後の風呂でいゝ氣持にあたゝまり、大タオルにくるまつて、つぎの化粧部屋の姿見の前に立つた時、眞知子はいつともより確かに五分長くその場を離れなかつた。鏡面の、洗ひあげられたばかりの美しい、健康な、五尺三寸の身體は、なんにもあわてる必要のないことを彼女に證明した。『——いつだつていゝのだわ、結婚なんて。』

部屋に歸つても暢び／＼と樂しい氣持が去らなかつたので、いつもだとすぐ何か讀みはじめるのに勉強机の前の藤椅子を廊下に引つ張つて行き、それに凭つかゝりながら氣取つた中音で知つてゐる歌を次々にうたつた。綺麗なたつぷりした聲を彼女は持つてゐた。外にはひえ／＼した夜氣の中に、仲秋の月が少し曇つて現はれ、廣いが、手入が屈かないのでどこか廢園の趣のある庭を照らした。蟲が鳴いた。彼女はこの荒れた庭が好きであつた。

二部屋へだてた茶の間の時計が十時を打つ頃には彼女も寢支度をはじめてゐた。其處でまだ女中のまづに肩を揉ませてゐた母にお休みなさいを云ひに行つた序でに、茶棚からチョコレートを掴み出し、寢床に持つて入つてしやぶりながら雑誌を拾ひ讀みした。が、十五分もしないうち、最後の一つを

剣いた銀紙と共に枕許に散らかしたまゝ、十三の娘のやうに他愛なく眠つてしまつた。

目白の奥にある嫂の實家の田口家では、毎年十月の半ばになると菊見を兼ねた園遊會を催し、各方面の懇意な家族や、親類や、病院關係の人々を招待するのが例であつた。今年は第三日曜が選ばれ、曾根にも大きな封筒の案内狀が届いた。未亡人は、眞知子のために是非行かなければならないと思つてゐるゝしかつた。しかしその朝になると持病の偏頭痛で床を離れることが出来なかつた。眞知子は自分もやめにしようと思つて見たが、それは許されなかつた。

『誰も影を見せないつて思はれちやまづいから、あんただけはいらつしやい。お嫂さんたちが東京にゐなけりやゐないだけ、斯んな時には義理は缺かされませんよ。』

未亡人はまた、眞知子の一番上の姉で、芝の上村家に縁づいてゐる辰子も行く筈であつたから、向うで落ち合へばひとりでも困りはしないだらうと云つた。眞知子の躊躇は介添役の有無と云ふやうなことからではなかつた。そんなお嬢さんじみた取扱には、もうずつと以前から服してはゐなかつた。ただ眞知子は、田口家の毎年の園遊會は、年頃の息子や娘を持つ母達に巧妙に利用され、主人の老博士は、停年で大學をやめる前からプロフェツソル・フェルミットレルの渾名を貰つてゐたのを知つてゐたので、このことが一週間前の母のお説教や、近頃よく田口家を訪ねたことなどと連絡がないとは思へられなかつた。同時に、それを意識して行かないやうには思

はれ度くない氣も一方には強かつた。

『――構やしない。何かあんな人たちでたくらんだつて、自分の考さへ變へなけりや、どうすることも出来やしないんだもの。平氣に行つてやるわ。』

禿げて、血色のいい、鼻の大きな、まつ白な顎鬚を持つた、好々爺らしい陽氣さと、醫者の職業的な物柔らかさの混和した見本のやうな主人は、丈も幅も夫に負けない位大柄な、權のある顔をした、器量自慢の紋服の夫人とともに、庭の入口のテントに立つて客を迎へてゐた。

『まあ、眞知子さん。』

五六人たて込んだ後のきれ目に、ひとり静かにその前に進み寄つた彼女を見ると、夫人は愛想よく呼びかけた。『よく入らして下さいました。お母様は。』

眞知子は母の頭痛のことを話し、なほその傳言として、折角の招待を外す残念さを述べた。

『そりやいかん。悪い風邪がぼつ／＼流行つてゐるから、御用心なさらんと。』

主人は醫者らしい質問の二三を、お愛想の代りにした。熱も何んにもないのだからと眞知子は答へた。

『なら直ぐと快くおなりになりますわ。でも、あなたただけでも入らつて下さつてどんなに嬉しいでせう。お母様には、この節はそれでもちよい／＼お目にかゝるのですけれど、あなたといつたら、本當に少しも顔をお見せにならないんだから。』

夫人は冗談と眞面目をいつしよにして咎めた。眞知子は顔

のはてるのを感じた。未亡人だつて、以前は近頃のやうにしが／＼この家を訪ねはしなかつたから。——眞知子自身の疎遠に就いて云へば、それは夫人から持ち込まれた縁談を二度まで拒絶したことに原因してゐた。

『何でした、眞知子さんが大學で聽いてるのは。』

『社會學ですわ、ね、さうでしたわ。』

眞知子が返事する前に夫人が引き取つた。

『ほう、偉いものを勉強してるんだな。』

『ですから私云つてますの。眞知子さん見たいなお美しい方が、社會學なんて似合ひませんつて。』

それはどう云ふ論據だか眞知子には分からなかつたが、ただ禮儀の微笑で黙つて聞いてゐる外はなかつた。主人はそれを見ると愉快らしい、無意味な、それで斯んな場合に一番役立つ東洋流の哄笑で、妻の奇抜な斷定と相手の間の惡さを二つながら葬つた。

新しい客が近づいた。眞知子はその關所から放免されるのが嬉しかつた。その前に夫人は、今日は是非とも晩御飯まで残つて欲しい、久しぶりだからそれ位のことば聞いて呉れてもよい筈だと云ひ、眞知子が母の頭痛を楯に辭退しようとした隙をも與へず、丁度庭から其處へ來合せた末の娘で、眞知子よりは二つ下であつたが、それでも五ヶ月前にもう結婚した富美子に、上手に彼女を引き渡した。

『富美ちゃん、眞知子さんよ、ごいつしよに花壇の方でも廻つて御覽なさいな。——相變らず何んにもおもてなしは出來ないのですけれど、菊だけは今年は上出來でした。』

二人は連れ立つて、云はれたものを見るために並んで歩いて行つた。言葉の通り菊は見事であつた。しかし客は花壇の前よりは、廣い庭の其處此處に設けられた模擬店の方へ熱心に集まつてゐた。この無邪氣な心理の働き方は、ことは違ふが、案内者の富美子の上にも同じく作用してゐた。打ち明けて云へば、三ところにも作つてある花壇をい／＼見て廻つて、父の受賣の菊作りの説明をさせられるよりは、もつと當面の、話し度くてたまらない話を富美子は持つてゐた。で、一番手近な一つを三分の一見てしまはないうち、そんなものは打つちやつて、大事な話題の方へ近づいた。

『——でも、眞知子さんはいゝわ。』

富美子は斯う云ふ風ではじめた。

『なにが。』

『いつまでも吞氣で、好きなこと御勉強出来るのですもの。』

『あんだだつて、なさらうと思へば何んだつてお出來になるぢやないの。』

『駄目。——ほんとに駄目よ、家を持つちまつちや。いちんち忙しくつて。』

眞知子はもう少しで笑ひ出しさうになつた。父の病院に勤務してゐる養子同様の夫を持ち、同じく父に供給された田園都市の文化住宅に二人だけで住み、これも同じく父の供給に相違ない婆やと小婢を使つて暮らしてゐる二十一の細君でも、結婚したとなれば人並に斯んなことを云ふのを教へられるのであらうか。でも田口の娘たちの中では、この氣のよい、そばかすのある、小さい富美子が眞知子は割に好きであつた。

から、相手の可憐な嘆聲を無視しないやうに氣をつけた。

『私また、あんななんか毎日ひま過ぎて困つてらつしやるんだともつてたわ。』

『あら、どうして。』

富美子は驚いた嬉しさうな聲で叫んだ。『それどこぢやないのよ。それなのに、誰にでもそんな風に思はれてるから口惜しくなつちまふわ。だつて、宅ひとりにだつてとても手がかるんですもの。ひとつは寝坊するからいけないのよ。私だつてそりや九時前には起きられないけれど、あの入つたら、それよかどうしても三十分は遅いでせう。それからやつと起きて来たともふと、さあ顔だ、頭だ、着替だつて家ぢう大騒ぎさせて、それで靴下一つ自分で穿かうとはしないんだから、憎らしいつてないの。』

しかし留守の間は十分ひまな筈だ、と眞知子が一言挟んだのに對して、富美子は決してさうでない譯を十近く並べた。先づ小鳥の世話と、一匹のベルシア猫の手入と、その猫の毛と同じくらゐ綺麗にウェーダさせるためには可なり時間のかゝる自分の髪結ひと、訪問と接客と、料理と編み物と、今でも一週に二度づつ稽古に通つてゐるピアノの練習と――

『ピアノつては、』

富美子は思ひ出したやうに、其處で話を轉しながら、『この間の帝劇のX―お聴きになつて。』

その著名なボーランド生れのピアノリストは月初めに十日間帝劇で演奏した。眞知子は行けなかつた。

『まあ、惜しかつたのね。私、二晩だけは行つたけれど、お

仕舞ひのショパンがどうしても聴きたくて、その積りで切符買つておいて貰つたのよ。ところが、どうでせう。病院の方で手の放せない患者さんが出来たとかつて、たうとう行かずにまひ。残念で諦めきれなかつたわ。ですから、あんな時にはA―の従妹が私いつまでも羨やましくなるの。旦那さん眼科でせう。どんなことしたつて夜まで引つ張り出されることは決してないんですもの。それから見ると内科は面倒で、氣骨が折れて、本當にいやだともつてよ。さうはお思ひにならない。』

實際、一方は命の問題であり、一方はこの上なく悪く行つたところで、誰かを盲目にするに過ぎないのであつたから、その訴に對しては眞知子は理論的に同意しないわけに行かなかつた。と、富美子は、すっかり満足し、なほ幾ら話しても話し足りない話題を續けるために、割に人の少ない洋菓子のレストランを選んで休まうとしてゐたところへ、夫の木村自身が入つて来た。醫者らしく身についたモーニングの胸に、接待係のしるしの赤いリボンをつけた木村は、眞知子と形式的な挨拶を交換するとすぐ、妻に近づき、明らかにそのため彼女を探してゐたやうに、何とかさんのお嬢さんが見えたと云ふ報告をした。

『奥さんも。』

『うむ。』

『よかつたわ。母さんさつきから待つてらしたのよ。』

富美子はその言葉で自分もまた同じ客を待つてゐる熱心を正直に表はしながら、でも傍にゐる眞知子を忘れるほど不作

法ではなかつたので、聞いた。『あんた御存じだつたわね、柘植さんのお嬢さん。』

『柘植さん——』

眞知子は思ひ出せなかつた。

『ほら、あの子爵の。——貴族院へ出ていらつしやる。』

『いゝえ。』

眞知子はそんなお嬢さんは知らなかつた。

『この春私たちの音楽會の時お逢ひになつたと思つたけれど。——入らつしやらなかつたの。だうりで。多喜子さんつて、快活ないゝ方だわ。ピアノが御いつしよなもんだから、この節私の一とう仲よしなの。』

富美子はこの打ち明けを無邪氣な笑ひでし、眞知子とも屹度いゝ友達になれるから、一緒にあちらへ行つて紹介しようと思つた。眞知子はもう少し足を休めて、其處のおいしいお菓子を食べて行きたいと思つたので、彼等は別れることになつた。

『ぢや、また後でね。——お菓子もだけれど、向うのおすし、ちよつとおいしいのよ。めし上つて見て頂戴。』

富美子はそのことを云ひ残し、妻がしやべつてゐる間餘計な口を入れないでにや／＼と温順に待つてゐた夫と並んで、楽しさうに、而かも十分奥様ぶつて済まして出て行つた。

一杯の珈琲と、一皿の菓子は、三分間手のつかないまゝ眞知子の卓に載つてゐた。云ふまでもなく彼女を其處に引き留めたものは、そんな飲み物や食べ物ではなかつた。眞知子は

斯かる場合に未婚の娘が普通感じさせられるやうな羨望からは自由であつた。假りに何か似た感情があつたとすれば、それは富美子の幸福な結婚そのものよりは、その結婚に、寧ろその夫に満足し切つてゐる、彼女自身の單純な慾望に對してであつた。眞知子は、一年ばかり前母が急性の腎臓炎で入院してゐた關係から、木村をば富美子の夫としてより前に、病院の一醫員として知つてゐた。丁度彼女との結婚を決定的にする第一條件であつた學位が取れたばかりの頃で、彼は小さい稍々尖つた頭を假漆塗の羽目板のやうに綺麗に光らせ、それも誰のよりも綺麗なまつ白い上つ張りをふは／＼させて、廊下を氣取つて歩きながら、こつそり看護婦にからかつた。特別に親密だと云ふ噂のあつた、上方訛りの、眼の可愛い看護婦をも眞知子は知つてゐた。

しかしあの楽しさうな富美子に取つて、斯んな餘計な回想が何の役に立つだらう、と考へると眞知子は馬鹿々々しかつたし、下らないことを忘れもせず覺えてゐる自分に對しても厭な氣がした。で、急いで卓の上のものを空にしてそこを出ると、ふた足と離れないうち誰か後から右の肩を突いた。

『幾ら探したか知れやしない。』

この言葉と姉の派手な美しい顔は、同時に眞知子の目と耳に入つた。

『そんなに探して。』

『だつて、斯んな隅つこの不景氣な店にゐたんぢや、分りつこないぢやないの。』

『これでも、富美子さんの御案内なのよ。』

眞知子は云ひながら、彼女が引き受けて呉れたその役目に對して、どんな報酬を自分が拂つたかを姉に知らせたら、屹度面白がるだらうと思つた。が、話さないうち、辰子は田口の奥さんに聞いたと云つて母の病氣のことを云ひ出した。

『大したことはないんだつて。』

『いつもの頭痛。』

『ならいゝけれど、お母様この節は少し弱つたわね。まあちやんも餘計な心配をさせないやうにした方がいゝのよ。』

『お母様が餘計な心配をしたがるからいけないんだわ。』

『あんなこと云つて。』

『でもさうぢやないの。』

『さうぢやありませんよ。』

『さうですよ。』

議論の主題についてはどちらも口を出さなかつた。でもそれが何であるかはお互ひに分かりきつてゐたから決して負けず、姉妹らしい微笑で云ひ張りながら歩いた。

昔の大名の下屋敷であつた庭は、どちらに向いても十分廣かつた。また違つた方向で違つた特色を持つてゐた。二人の進んだ方は雑木と赤松の自然の森に續き、旨しい食べ物のレストランも其處までではなかつたし、従つて一般の客は近づくかなかつたから、歩きながら話すには便利であつた。暫くぶりに逢つて、身内のものだけ分かりもすれば楽しくもある話を二人はためてゐた。例へば北海道の方の話。眞知子のすぐ上の姉で、Yーの高等學校の教師の山瀬に嫁いでゐるみね子や、その一人の小さい娘の話。都合で近いうちに皆んなして出て來

るかも知れないと云ふ便りのあつた話。――

『さう云へば、その手紙に、』

眞知子は右に並んだ姉の表情を探るやうに見詰めて、『お姉さんのことひどく心配して來ててよ。』

『どうして。』

『誰か東京から行つた人に、義兄にいさんのこと聞いたらしいの。』

『だつて、上村の道樂の話なら、今更めづらしくもないぢやないの。』

辰子は平然とそれを云つた。近縣の多額納税議員の息子で、高商を出た後、父の縁故の深い會社で重役並みの待遇を受けてゐる上村は、遊ぶ金と時間に不自由はしなかつた。器量好みで大騒ぎして貰つた辰子に對しても、半年と誠實な夫でなかつたのは關係者に知れ渡つてゐた。

『でもこの節の様子はあちらに分かつてなかつたから、いろいろ聞いて驚いたらしいの。』

『誰だか知らないがそんな出舎まで行つて、そのひとも餘計なお世話ぢやありませんか。それで、一體、どんなこと饒舌つたつて書いてあるんです。』

眞知子の處女らしい羞恥と厭惡は、義兄の悪い噂の詳細を口に出して、その妻なる姉に報告することを許さなかつた。で、それには答へず、自分の感想の代りにした。

『でもよく我慢出來てねえ。私なら決してそんな生活には堪へられないわ。』

『さう思ふのはまあちやんが二十三で、私はそれより六つ上

だつて證據ですよ。』

『いえ、私なら二十三で我慢出来ないことが、二十九だつて三千だつて出来るとは信じないわ。』

『ちやそれが出来るんだから、うんと感心して貰つてもいい譯ね。』

その言葉の通り、自分の生活を巧みに調節することを知つてゐた辰子は、夫の放蕩に對してもヒステリにはならなかつた。その代り彼女は蕭道樂をし、芝居に行き、色んな藝事に手を出し、同じやうに不幸な、金持の、お洒落の、中には浮氣者もある氣樂な婦人たちの遊び仲間を持つてゐた。子供がなく、両親は田舎の家に別居してゐるので、どんなことでも出来た。眞知子は姉のこれ等のやり方には賛成されないものがあつたし、傾向や趣味から云つても違つてゐたに拘らず、かつきりした、女々しい點のない自由なその性格は嫌ひではなかつた。寧ろ非常に違つたものが非常に似てゐると云ふ有り勝ちな例に準ずれば、兄弟ではその姉が最も自分に近い氣がした。顔も二人が一番よく似てゐた。たゞ辰子の方は幾らか肥りかけて、結婚した三十女の瑞々した膨らみを持つてゐたに比べると、眞知子は中學生のやうにたゞまっ直ぐであつた。並んで歩いてゐる肩を見ても、姉よりは二寸高かつた。

二人は十月の午後の太陽の下を黄色く錆びた森に沿うて歩きながら、再び庭の方へ出ようとした。餘興の太神樂が子供つぽく、陽性な太鼓の音を傳へた。眞知子は晩までゐるか姉に尋ねて見た。辰子は友達と多居の約束があるので頓て行かなければならぬと云ひ、客がたて込んでゐれば黙つて歸るか

ら家の人たちには後でさう傳へて貰ひ度いと云つた。眞知子は引き受けた。併しまだ森からすつかり離れて仕舞はないうち、辰子が逢はずに行くかも知れないと話したばかりの主人夫妻が、富美子と共に同じ年頃の美しく着飾つた娘と、その母らしい中年の夫人と、今一人の若い立派な様子をした紳士を案内しながら、反對の路を歩いて行くのが目に入つた。眞知子たちは斜面の小高くなつた木立の間を抜けてゐたので、向うから氣づかれないで過ぎた。

『あのお嬢さん知つてゐる。』

『柘植さん云ふんぢやない。』

眞知子は富美子が先刻話したことを思ひ出しながら答へた。辰子は連れの紳士に就いても知識を持つてゐて、彼が有名な舊家で千萬長者の河井家の一門であること、早くからケソブリッヂに留學して考古學を専攻し、日本にはやつと半年前歸つたのだと云ふことを傳へた。

『北海道のお兄さんなんぞも、あちらで暴意にしてゐたらしいの。何んでもそんな話だつたわ。』

『どこでお逢ひしたの。』

『この間の歌舞伎の慈善興行の時、今日とすつかり同じお取り巻よ。』

この最後の言葉で話したのも聞いたものも一緒に微笑した。云ふまでもなく、田口夫妻が目的なしにそんな役目を勤める筈はなかつたから。同時に眞知子は、當面のさう云ふ大事な仕事がある間は自分にまで餘計なお世つかいをする筈はなかつたのだと思ひ、今日要らない心配をして來たのを滑稽

に感じた。

晚餐は佛蘭西風なあつさりした、それで完備した食堂の裝飾に負けない贅澤なものであつた。人数は多くはなかつた。

大部分内輪の人々で、その中に残つた河井は最も大切な客として取り扱はれ、多喜子と並んで掛けさせられた。眞知子は反對の側に富美子と並び、右の椅子には食堂が開くばかりになつて飛び込んで来て、女主人の倉子からの親密らしい打ち解けた調子で遅刻を詫じられながら、竹尾と云ふ名前で紹介された若い醫者がかけた。しかし眞知子の注意は、そんな知りもしない、鄭重にもされない男のひとよりは、向側の二人の方へ引かれた。まはりの人々はみんなその二人を目標にして話したり聞いたりしてゐたし、それを傍觀することは面白くないとは云へなかつたから。

最初は河井の邸内に建ててゐる研究室のことで話が賑はつた。

『B君の説によれば、』

主人は主任の建築家の名前を挙げながら、『完成の上は、日本では他に類のない理想的な研究室になるだらうと云ふことでしたが。』

『それ程のものではありません。』

河井はもの靜かな、おつとりした態度で受けた。

『いつ頃お出来になりますの。』

夫の後を繼いで倉子は聞いた。

『豫定の通りに行くと、あと二カ月位で大抵すむ筈です。』

『お出来になりましたら、是非ねえ、奥様。』

倉子夫人が柘植夫人に誘ひかけながら、一緒に參觀したいものだ云ふ意味を述べると、夫人は勿論賛成し、同時に娘もそんなものを見ることに非常に興味を持つてゐると云ふことをつけ加へたので、多喜子はそれに依つて都合よく話の仲間入をした。

『参考品の整理だけでも大變ですわね。』

『まだ打つちやつてあるんです。』

『あちらのお珍らしいもの、随分おありなのですつて。』

『整理がついたら、そのうちお目にかけませう。』

『多喜子さん如何です、少しお手傳ひなすつたら。』

主人は勧めた。『さう云ふ仕事は婦人の方に適當だと思ひますね。』

柘植夫人は多喜子が細かい分類をしたり、片附けものをしたりするのが子供の時分から好きであつたと云ふ證明を其處に挟んだ。

『でも、その方の知識が幾らかなければ駄目ですわね。』

『なに、馴れれば誰にだつて出来ます。』

この返答で多喜子自身は元より、その會話に口を入れた他の三人も非常に満足さうに見えた。それに續いた話の間に、河井は中央亜細亞の方を廻つて、今少し貴重な標本を集める積りであつたが、既に未亡人になつてゐる母の病氣の報知で旅程を繰りあげて歸つたのだと云ふことを眞知子は知つた。『あの當時の御容態では、御母堂が今の程度にまで恢復されようとは私はじめ誰も信じなかつたのですからね。』

『それにしても、よくまあ長い間お母様がお手放しになつた

と思ひますよ。』

倉子は今獨逸に行つてゐる長男を引合に出しながら、『殊にお宅様では外にかけ掛へのないお後嗣でいらつしやいますもの、ねえ奥様。』

倉子の言葉には何んでも決して異議を立てないことに極めてあるらしい柘植夫人は、この場合もすぐ同意し、あゝ云ふ確かりした立派な方でなければ中々出来ないことだと云つて賞め立てた。

『C—家から来ていらつしやるのよ。』

丸煮にした鶉の肉を上手に骨から放してゐた富美子は、その時徳川氏の血統を引いた大名華族の名前を挙げ、小聲で隣の眞知子に噂の人のことを説明した。

『今でもおわるいの。』

『一體にふだんお弱いのですつて。でも綺麗な、如何にも貴族らしい方だわ。ですからほら、違つてるでせう、河井さん。』

確かに、貴公子に見るやうな上品な風采と態度は、誰でもすぐ目につく彼の特長であつた。しかしさう云ふ型の人の陥り勝な氣取つた風や高ぶつた様子は彼にはなかつた。それでも周囲の露骨な諂ひに對して平氣で、愧かしさうな色もなく、鷹揚にこゝとしてゐるのを見ると、眞知子は一種反感に近いじれつたさを感じないではゐられなかつた。あんな人は到る所でもちやはやされつてゐるから、見え透いたお世辭を云はれても多分無感覺なのだ——眞知子には思へた。さうして何か奇妙な、異種の動物を見るやうな珍らしさで、間の

盛花の向うにフォークと共に動いてゐる、彼の華奢な女のやうな指を眺めた。

食事がすんだ。客はつぎの廣間に移つた。食堂で醸されてゐた空氣は其處でも變らなかつた。河井の意を迎へ、彼の注意を少しでも多く多喜子の上に向けさせようとするためには、あらゆる努力が費やされた。彼女が富美子を相手にして弾かされたピアノのデュエットも、云はばそのプログラムの一つであつた。

演奏は申分なく行つた。人々はわざとほんものの音樂會の時のやうに喝采した。河井も一緒に手を叩いた。好きな酒のあとで売けた圓い顚頂部を、赤々と上機嫌に輝やかしてゐた主人は、人一倍はしやいで、誰よりも高くばち／＼とやつた。

『ほんたうに、多喜子さんはいつ伺つてもお立派で。』

倉子はさう云つて柘植夫人を顧みながら、河井の同意を求めた。『ねえ、あれ程お弾きになる方は、黒人の中にだつてさう澤山はございませんわ。』

河井は短い讃辭でそれを肯定した。それから夫人が返報に富美子の技倆を賞め立てるのを邪隱しないやうに注意しながら、彼は二三脚向うの椅子に菊の大きな鉢を傍にしてかけてゐた眞知子に話しかけ、彼女も何か弾いてくれるなら仕合せだと云つた。眞知子はびつくりした。食堂に入る前、曾根の妹として形式的に紹介されたきりの彼から不意にそんな所望を受けたのと、富美子や多喜子と共に人の前で弾くほど上手ではなかつたから。